

佳作

善意のバトン

和歌山県 智辯学園和歌山小学校六年 中井 貴世

皆さんは、白杖を持った方がいたら声をかけることが出来ますか。

「バスが来ましたよ。」

小学三年生の女の子が白杖を持った男性に声をかけて、温かな小さな手でバス通勤を支えます。十年以上たった今でも友人や後はいがその行動をひき継ぎ、小さな親切のリレーは「善意のバトン」で受けつなげていっているそうです。

その話を私が知るきっかけになったのは、小学二年生のころから続けている、声のボランティア「和歌山グルーブ声ジュニア」で担当になった記事でした。グルーブ声ジュニアは小学生新聞やこども市報を録音して、支えん学校や福祉施設に届けるボランティアです。盲学校の授業で使われたり、お年寄りが聞いて下さったりもしています。

情報を耳で聞いて想像したいと作文に書いたことがあります。これからも私は声のボランティアを続けたいです。顔も名前も知らない誰かのために私の声を届けたいです。そして、絵本からもらった、善意のバトンをつなげていけるように、私もその一員になりたいと思います。

今月、私が担当になった記事は、この小さな親切のリレーのお話がすてきな絵と共に、『バスが来ましたよ』という絵本になり、発売されたという内容でした。

いつも通り、記事をノートに間違いないように書き写し、読む練習をします。分からない言葉は調べ、内容をしっかり理解します。記事を見て私はしよげきを受けました。なぜなら、白杖を持った男性に最初に声をかけたのが小学三年生の女子だったからです。私は声のボランティアとして視覚障害のある方について知っていたし、自分はだれかの役に立ちたいと思っていました。学校の通学中に電車では白杖を持った方が駅員さんと一緒に乗っておられることもあります。いつも私はその様子を見ているだけであの女の子のような行動をとれたことがあります。だからこの記事は私を目覚めさせるために、担当になったのではないかと思ったのです。

声のボランティアは六年生で卒業になります。グルーブ声ジュニアは卒業だけれどほかのボランティアもたくさんあります。私でもできるボランティアを探して活動をつづけたいです。

昔、私は自分が目が見えなくなったら、いろんな